

カトリック仙台司教区・カリタスジャパン 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

第4回 東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議 全体会

今回は、前回ご紹介できなかった2014年6月26日(木)、第4回 東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議の全体会について、ご紹介いたします。

また、仙台教区滞日外国人支援センターに新しいスタッフが1名増えましたので、ご紹介させていただきます。

6月26日 全体会

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

第4回全国担当者会議の最終日は、郡山教会で福島県小教区の取り組みについてのお話を各小教区の方より聴いた。

どの支援方法が最善ということはなく、それぞれの地域に見合った支援方法がある事を確認し、そして、被災者の方と長く寄り添い、忘れずにいる事の大切さを改めて感じる3日間となった。

全体会司会は、神田裕神父で進められた。



◆菊地功司教(司教協議会復興支援担当司教)の挨拶◆

今年の2月に開かれた司教総会において、東日本大震災の復興支援活動を今後3年間継続していこうということを決めた。そのほか、次のようなことも話し合われ、決められた。これまで、日本の教会の3管区は、それぞれにベースを構え、そこを中心に活動してきたが、これからは、「3管区体制」にとらわれずに現場の実情に応じて、柔軟に活動を進めていこう、と決意した。

岩手県・宮城県の沿岸地域の復興を支援していくことは当然であるが、福島支援に全力を尽くしていこう。昨日、一昨日と現地の視察を続けてきたが、復旧していないところが目に入った。どうすればいいのか、これからみんなで知恵を出し合っていこう。

◆福島デスク長：Sr. 野上幸恵◆

福島デスクは、これまで二本松教会で行っていた活動が、5月初めに、野田町に引っ越したばかりである。しかし、この2ヶ月で、理解したことを分かち合っていきたい。

福島に住んでいる人が被災者である。だから、私たちは一緒に住んでいる人を支援していこうということである。現在行われている点としての支援活動を、つないでいって線にし、これを面にし、次いで、立体的にし、有機的な支援活動にしていきたいと思っている。先だって、会津若松で170人のプロテスタントの人々が集まり、「原発と差別」について話し合った。そこで、洗礼とは何か、洗礼を受けている私たちはどう福島と関わっていくべきか、世界中のキリスト者が心を一つにして関わっていく、ということが話し合われた。私は、「福音は福島から発信される」のだと感じている。

第1部 「福島に生きる思い」

この2日間、私たちは、福島について、いろいろな人が話すのを聞いた。福島についての「考え方」また、支援についてのアプローチも違っている。放射能、食べ物についての考え方も違っている。福島で支援活動をしてくださっている8教会の代表者は、自身が被災者でありながら、支援者でもある。その方々の分かち合いを聞こう。

1) 佐々木三代子さん(いわき教会「チーム平・堂根」)

いわき市で津波被害を受けた方は、1万5、6千人おられます。それまでは、漁業に携わる人々は、一戸建ての大きな家に住んでいました。それが、小さなアパートみたいな家に住まなくてはならないということになってしまいました。

その人々が、何か自立のために、収入が得られることをしたい、ということで、そのお手伝いが始まりました。お餅作り、佃煮作りの一方、お菓子屋さんのお菓子の販売やかまぼこ屋さんのかまぼこの販売も始めています。風評被害と闘いつつ、自立支援をおこなっている。

2) 金澤弘子さん(白河教会 白河みみずく責任者)

2011年8月から傾聴ボランティアをしてきた。キリスト者として、ここで被災した双葉町の人々とかかわっている。この町の人々は、漆黒の闇の中にいる。福島原発、どうしていいかわからない。

気仙語の祈りが心に響いた。この祈りの「語ってください、教えてください」と祈る方に私はあっている。双葉の人は、原発で過去を失い、未来を失っている。そして、現在も失った。

福島から本当の光が現れる。「漆黒の闇 凝視せば 光在り」

3) 鍵谷和子さん(郡山教会)

富岡町と川内村の人々が入っている仮設住宅で、ボランティアをしている。

そのメインセンターは「おだがいさまセンター」という。この仮設には、現在400名の人がいる。津波、原発の被害を受けた人々が入っている。その人々を癒すために、社協の人々が準備している。

編み物のグループで、「どなたでもどうぞ」というグループを見つけたので加えていただいた。2011年11月から始まった。1週間に1度の集まりの場では、私の意見は言わないで、ひたすら、自由に皆さんが話すのを聞いている。ただのおばさんとして参加している。このやり方で続けていきたい。



第2部 「今後どのような支援が必要か」

まず、司会者の「支援の方法について」何かヒントがあれば、という促しで、スピーカーから補足説明がなされた。

1) 高野郁子さん (原町教会)

——精神的ケアが求められている。家がほしい、人がいない。医療スタッフ、先生、介護者も足りない。

2) 柳沼千賀子さん (二本松教会)

——講演会に招いてください。いくらでも、話しにいきます。

3) CTVC

——現在は首都圏からボラパックを行っているが、他の所からも可能である。

「福島から語る」という講演会を何度も開催しているが、生の声にまざるものはないので、英語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語に翻訳して発信していきたい。テープおこしと翻訳者を募集している。



4) 宮下神父

——韓国の司教団が原発についてメッセージを出している。今、それを翻訳中である。「技術と教会の教え 核発電に対する韓国司教団の省察」というもので、1万部印刷の予定である。ぜひ、読んでほしい。



昼食後、参加者は、自分の教区、修道会などで、今回学んだこと、知ったことを具体的にどのように取り組んでいくかなどについて分科会に分かれて話し合った。

福島教会の参加者は、聖堂において「CBC」復興支援の3年間の歩みの報告を受けた。



4) 品川美枝さん (会津若松教会、社会福祉部)

会津若松教会では、社会福祉部に120名が登録し、自主避難者を支える活動をしている。自主避難者は、一人ひとり抱えている問題が違っており、複雑である。何重にも問題が重なっている。

会津若松は、地震も放射能の被害も少ないということで、郡山、本宮、福島から避難してきている人が多い。放射能を恐れている。チェルノブイリからきた人の話で「体内被爆に気をつけなさい」と言われた。「甲状腺だけではなく、心臓などに、被害を受けていることがある」と。自主避難の人々に、会津の郷土料理などを一緒に作り、不安を与えないようにしている。

5) 柳沼千賀子さん (二本松教会、NPO やさい畑)

福島の農業支援を行っている。現在40軒の農家から仕入れをし、販売している。理解を示してくれる人と、徹底的に反対する人と、二極化している。

情報が正しく伝わらない、ということを感じている。報道で、危険なことは報道されるが、安全なことは報道されない。

私は、今の状態は、ヨーロッパのルネッサンス期と似ているのではないかと感じている。ルネッサンスはカトリック教会が堕落し、教会離れの時代だった。ルターが現れ、ペストも流行した。イグナチオ・ロヨラ、ザビエル、アピラのテレジア、フィリッポ・ネリが輩出した時代でもあった。福島も変わる時、教会のあり方を考えなさい、と言われてるように思う。

福島の問題は大きい。日本の教会として、「福島対策本部」が出来ないのが残念である。

6) 高野郁子さん (原町教会代表)

あれから3年3ヶ月たった。私は、その時、海から3キロ、原発から20キロの所にいた。生きるための模索をした。

原町教会は、多くの支援を受けた。転籍をした家族は3家族7人であった。これまで、12、3人の信徒だったが、現在は20人を超えるようになった。信者も来るようになったが、来なくなった人もいる。2年間、ボランティア活動をしているが、被災の状況が一人ひとり違うので、皆の足並みがそろわない。

- 1年目——自分の仕事と、教会の建て直し。
- 2年目——自分と教会のことで頭いっぱい。
- 3年目——ボランティアを受け止めつつ、行う。



7) 高橋喜彦さん (野田町教会代表)

何を信じたらいいのか、わからなかった。

私たちが心配したのは、子どもたちへの健康のことである。子どもたちが結婚の時期になり、福島の子は福島の子と結婚しなさい、と言われる可能性もある。

私たちは原発の被災者である。

8) 鈴木キミ子さん (松木町教会、愛の支援グループ)

松木町教会の広報誌「アンジェルス」より、2編朗読。

自分たちが被災者として、浪江町から避難している人々を支援することにより、結果的に元気をもらっている。

福島は回心の地。

「犠牲者を追悼し、被災者の癒しを求め、復興支援活動に祝福を求めるミサ」

主司式：平賀徹夫仙台司教

共同司式：仙台教区司祭団、参加司祭

説教：幸田和生東京教会管区責任司教



幸田司教のホミリア

列王記下 24：8-17 マタイ 7：21-29

申命記的な考えによれば、王が神に従えば、国は栄える。しかし、王が神に逆らえば、国は亡びる。列王記によれば、国は亡んだ。しかし、それで終わったのではない。申命記には、祝福と呪いについて、30章に書かれている。そこには、もう一度、神に立ち返るなら、繁栄を取り戻してくださる。神は、もう一度私の元に立ち戻り、新たに歩み始めなさいというメッセージをくださっている。

マタイ福音書を読んで、コリントの信徒への手紙 1の13章を思い出した。どんなに素晴らしい言葉をもってしようとも、愛がなければ意味がない。

3日前から気になっていることがある。福島でこの集まりをしている。皆さまもご覧になったように、岩手、宮城と福島は違う。とまどっている人もいるだろう。特に、岩手、宮城で活動している人は、そう感じているかもしれない。

いわきで津波をうけた人で、復興支援住宅を希望している人は、その住宅は着々と完成している。しかし、岩手、宮城では違う。オール・ジャパンの中で互いに理解し合い、大切にしながら、歩いていけたらよいと思う。天の父のみこころを行う——これが私たちの根本的な願いである。

奉納

分かち合いでまとめたものを、各6グループから奉納として発表し、まとめた用紙をささげた。

- A-1 祈る。伝える。つながる。現場に行く。
- A-2 巡礼ツアー、ボランティア募集、報告し、情報を収集し、知らせ、風化を防ぐ。
- B-1 原点に戻る。彼らが教えてくれることが原点。
 - ①知る——私たちは知らないことが多い。
 - ②伝える——知ると伝えることは、同じように行われなければならない。福島の問題は、世界の問題だと意識する、させること。
 - ③つながる——ボランティアツアーなど、人をつなげる者となる。
 - ④祈る——日本にいる外国人も心をつなげて祈る。
- B-2 正確な情報を発信しよう。
 - ①祈りを信仰のもとに行う。修道院で、祈りのシスターズリレーを行う。
 - ②原発について学ぶ——私たちの生活を根本から学ぶ。
 - ③福島の特産品を売る。
 - ④CTVCへの協力。

- C-1 子ども
 - ①サポート体制の強化。
 - ②福島サポート交流センターを作る。
 - ③原発について、正しい理解を得る。
 - ④忘れないために祈りつづける。
- C-2 献金
 - ①派遣
 - ②物品支援
 - ③祈り
 - ④研修——意識改革——現地に行って、風を感じ、味わう。



全国担当者会議参加者と、仙台市や福島県各教会などからこのミサに参加した人々は、心をつなげて祈り、それぞれの人が「私に出来ることをしていこう」と決心し、各地へと派遣された。

よろしくお祈りします！

仙台教区滞日外国人支援センター クラリータ・サンチェス

この7月末から、仙台教区の支援のためCTICから2年の契約で派遣され、仙台教区滞日外国人支援センターで働くこととなりましたクラリータ・サンチェス（通称、クリア）です。

私はフィリピン・セブ島出身で、日本に来たのは2013年8月9日。カトリック東京国際センター（CTIC）で働いていたフィリピン人のレイミッションナリー（信徒宣教者）がフィリピンに帰ることになり、後任として紹介されたことがきっかけです。CTICではレイミッションナリーとして、養成講座の担当、信仰育成の担当をしていました。

日本語の勉強をしたのは、2013年9月から2014年6月までの10か月間で、まだあまりできませんが、日本のことをもっと知りたいため、頑張ってみなさんとコミュニケーションをとりたいと思っています。

日本料理は何でも好きですが、特に好きなものはお寿司。でも、ただひとつ嫌いなものは納豆…。趣味は読書（遠藤周作が好きです！）と映画鑑賞（黒澤明の映画は全部見ました！）。

これから、どうぞよろしくお祈りいたします。



（左からギャリー神父、CTICの方、クリアさん、林さん）